

「会報」を読む楽しみ

松浦 元子

「何でもとっとく元子ちゃん」と家族・友人に笑われている私のファイル類の中で、「よこはま市民オンブズマン会報」のファイルは活用頻度の高いもののうちベスト3に入る。県警問題・「21世紀座」・「大さん橋」・ごみ問題・自治会町内会など、市民として考え、行動しようとする限り忘れられない大切な問題について、振り返って理解したいと思ったときの心強い味方だ。

市の行政について知りたいと思ったとき頼れる手段としては、他に

1. マスコミ情報、
2. 横浜市広報印刷物・インターネット、
3. 市民情報センター、
4. 市役所・区役所、
5. 市会議員、
6. NPOリーダー

といった方法が考えられるが、横浜では1.2.5.があまり頼りにならない。多くの市民の職場や学校が東京であることから全国紙の影響が地元紙をしのいでいること、市は結構何でも市民に知らせているけど目的の情報を探し出すにはかなりの予備知識が必要になること、高度成長期の市政が職員と行政組織を大きく変革した一方で政党・政治家は多少今風のファッションを身にまとっていても本質的に「田舎政治家」レベルでしかないこと、などが主な理由だ。

4.6.は非常に頼りになり、利用できれば市内で起きることなら何でもわかるほどだが、個人的な信頼関係や基礎的な知識・情報を持っていることが前提になる。「会報」は誰でも利用できる開かれた方法である、という点でこれらの手段より遥かに優れている。そのように高く評価しているのは、私のような変人(?)だけではないようだ。今春、会報に拙文を掲載していただいた時、発行当日

たまたま電話した某大物ジャーナリストから「読みましたよ」と言われた。会報と活動内容に対する注目度は「通」の間でも非常に高いらしい。

「情報公開の進展は中田市政の大きな成果の一つ」。現市政にやや懐疑的であるらしい鳴海正泰氏（関東学院大学名誉教授・元横浜市財政局長）もそう評価しているが、そうとは言えない点も多いようだ。例えば、毎年度ごとに作成されている「横浜の情報公開」という冊子には一年分の情報公開請求の項目とその結果が一覧になって掲載されているが、読むと「一部開示」「非開示」の多さと、どうしてこんなことまで、と思うようなことまで公開されないことに驚く。

コールセンターは何を聞いても「お調べしますのでお待ち下さい」。シティフォーラムは「約二時間、ほとんど事例発表で終わるケースが多く、深い議論には発展しない。市長のスピーチだけが耳に残る。」（7月5日 神奈川新聞社説）、カレーミーティングは「偉い人に囲まれて自由に市長にものが言える雰囲気などではなかった」（出席者談）。

どうやら市長室が直接市民から受付けていた案件を市民情報センターに移管し、お為ごかしの対応でお茶を濁そうとしている分野までであるらしい。市民—行政間の情報のパイプは目立たないようにじわじわと狭められているのではないかとさえ思えてくる。

このまま中田市政が続くなら、戦って勝ち取らなければ情報を得られない、という状況はこれからますます多くなってゆくのもかもしれない。でも、オンブズマン活動には、そして横浜というまちには、そのために戦うだけの価値がある・・と私は思う。

